Interview

保下真澄さん

Profile/

石川県輪島市出身、切り絵作家。

グラフィックデザイン等を行うかたわら、国内外問わず個展やグループ展で切り絵の新作を発表し続けている。

1月1日、故郷である石川県輪島市への帰省中に能登半島地震に被災、ご家族は現在も本庄市で避難生活を送られている。

防災特集
特別インタビュー

あの日、輪島でおきたこと

どこに住んでいても、「被災者」になる可能性がある。

決して他人事ではない「能登半島地震」

令和6年1月1日午後4時10分、石川県能登地方でマグニチュード7・6の地震が発生し、石川県輪島市、志賀町で震度7を観測しました。

元日、多くの方が帰省している最中に発生した大地震。大きな揺れとともに引き起こされた家屋の倒壊や土砂崩れにより、あっという間に道路等のインフラが寸断され、長年暮らした家からも閉め出され、孤立してしまった被災者が数多くいました。

「私たちが住む地域は大きな地震が来ないと思われていたんです。でも、実際に大地震が起きてしまった」。そう語るのは、輪島市の実家に帰省中に被災された保下真澄さん。保下さんのご家族は、被災した故郷には戻れず、今もなお本庄市内で避難生活を送られています。

皆さんは、「自分が被災する」ことを想像したことはありますか。保下さんの経験から浮かんでくる被災者の「現実」は、決して本市に住む私たちにとっても他人事ではありません。

あの日、輪島で起きたことから、今私たちが心がけるべきことは何なのか。今一度、一緒に考えてみませんか？

変わり果てた故郷での避難生活

「地震が発生したのは、輪島市から60㎞ほど離れた七尾市で買い物をしていたときでした」。その揺れの大きさから、ただ事ではないと感じた保下さんとご両親は、すぐに車で引き返して実家に戻ろうとしました。

しかし道路も土砂崩れで寸断され、車のタイヤも瓦礫（がれき）でパンク。地震が発生した1月1日の夜は厳しい寒さの中、車中泊を余儀なくされました。「翌朝出発し、なんとか実家までたどり着いたものの、家は傾き、家財道具は散乱していました」。長年暮らした町、そして実家は1日で変わり果てた姿となっていました。

その後、先に避難していた祖母や近隣住民とともに、実家近くの民家に臨時でしつらえた避難所で過ごすこととなった保下さんご家族。「指定避難所もありましたが、行くまでの道も土砂崩れで寸断されていました。そのため水や食料品等の備蓄品も限られた数しかありませんでした」。電気もつかず連絡手段も乏しい中、皆で物品を持ち寄りながら過ごす日々が続きました。

転機となったのは、皆で雪の上に書いたSOSの文字。自衛隊のヘリが気づき、外部と連絡が取れたことで、発生から6日経った1月6日、救助されることとなりました。

その後、ご両親と祖母は縁を頼って本庄市で避難生活を続けられています。

自分たちでできることはやる

「被災したからといって、支援をしてもらうのが当たり前と思うのは私は違うと思います。今回の地震のように、助ける側の人も被災している可能性だってあるんです」。

保下さんは、自身の被災経験を振り返り、大切なのは自分自身の〈心持ち〉だったといいます。「被災して大変なのはもちろんですが、〈自分たちでできることはやる〉という意識を持っていたからこそ、皆で助け合い、前を向きながら乗り越えられたんだと思います」。

何かが起きた時、自分がどうありたいか

保下さんの故郷も元々は大きな地震が来ないと思われていた地域でした。しかし、実際には大地震が起きてしまった。

輪島の話は決して本市に住む私たちと無関係ではないのです。

「自分が住んでいる地域は大丈夫だと思いながら生活をしていると、思ってもないことが起きた時に立ち止まってしまう。何かあったときのために、自分がどうありたいか、命を守るには何が大切かを、今一度考えておくことが大切なんだと思います」。

あなたは災害が起きた時どうありたいですか？

被災前、故郷の実家前で撮影した保下さん一家

後ろに写る実家が被災。集落全体が同様の状況のため、現在生活している方はいないという。

←次ページからは、地震への事前の備えに関する特集を掲載しています。